

# 芥川龍之介「鼻」論

——コミュニケートの願い——

田村修一

五八

## 一、作品の背景

「鼻」は一九一六年二月、第四次『新思潮』の創刊号に掲載された。それが夏目漱石の賞賛を受け、芥川が文壇に華々しく登場した、というのが、芥川を語るうえで欠かせないエピソードになっている。その第四次『新思潮』創刊のいきさつについては、久米正雄の「―愛読者のために―『鼻』と芥川龍之介」（『現代』一九三四・一二）や松岡譲の「第四次新思潮」（複製版『新思潮』別冊一九六七・一二）で明らかにされており、久米のものによれば、漱石門下に入っていた久米、芥川らであったが、「原稿を書いて行つて先生に見てもらふといふことはとても恥かしい、それに向ふも迷惑だらう」から、「僕等の作品を黙つて活字にして先生に送つたら見てくれて、我々の価値を知つてくれるだらう、従つて世間でも僕等の価値を分つてくれる者は分つてくれるだらうといふので創刊した」とのことである。つまり第四次『新思潮』

は、これは松岡の言葉であるが、「漱石を第一の読者にして」創刊されたのであり、そうであれば笠井秋生による、「鼻」執筆中の芥川は、読者

としての漱石を強く意識しながら筆を進めていたにちがいない。このことが、「鼻」のモチーフと無縁ではなからう<sup>1)</sup>という指摘を等閑に付すことはできない。しかし具体的には、漱石を意識したことが、どう作品に反映されているのか。それにはやはり漱石によるあの有名な書簡にヒントがあるものと思われる。ここでも引いておきたい。

あなたのもは大変面白いと思ひます落着があつて巫山戯てひなくつて自然其儘の可笑味がおつとり出てゐる所に上品な趣があります夫から材料が非常に新らしいのが眼につきます文章が要領を得て能く整つてゐます敬服しました、あゝいふものを是から二三十並べて御覧なさい文壇で類のない作家になれます（一九一六年二月十九日付芥川龍之介宛書簡）  
これはもちろん漱石が「鼻」について「賞賛」したところであ

るが、「落着があつて巫山戯てゐなくつて自然其儘の可笑味がおつとり出てゐる所」とは、一所懸命であくまでも眞面目な禪智内供を、客観的に見ることでできるおかしさであろう。内供はけつしてふざけてはおらず、一所懸命なのが、かえつて読者に「自然其儘の可笑味」を感じさせるものとなつてゐるのである。これは漱石の「吾輩は猫である」の登場人物を想起させるものであると言つていいだろう。しかし漱石のこの「賞賛」は、「鼻」については言へても、芥川文学一般について言えるかといへば疑問である。例えば「鼻」との関連性がしばしば指摘される「芋粥」に出てくる五位の侍は、「鼻」の禪智内供が醸し出すような、「自然其儘の可笑味さ」を持ち合せているとは言えない。しかし芥川文学全般を眺め渡したとき、禪智内供よりは、五位の侍の人物造形のほうが、ずっと芥川臭を感じさせるものなのである。すなわち、漱石の予想どおり芥川は「文壇で類のない作家」にはなつたが、それは「あゝいふもの」(「鼻」のようなもの)を二十並べた結果であるとは思われない。極論すれば、芥川は、「あゝいふもの」は「鼻」しか書かなかつたのではないだろうか。赤羽学や越智良二が、芥川の「鼻」と漱石の「吾輩は猫である」に登場する金田「鼻子」との関連性を指摘していることも注目されるが、「鼻」は漱石を意識した、芥川の作品のなかでも異例といつていいほど漱石の影響が強い作品であると言つていいように思われる。つまりこの作品が漱石の賞賛を受けたことは、全くの偶然とは言えず、芥川が漱石を意識して書いたことの、計算づくの勝利

であつた可能性が高いという事である。

## 二、長い鼻をもつ内供

「鼻」の題材として、『今昔物語集』巻第二八第二〇「池尾禪珍内供鼻語」、「宇治拾遺物語」巻第二(七)「鼻長き僧の事」、またゴーゴリの「鼻」などが指摘されているが、それらには芥川の「鼻」のような、長い鼻を気にしている僧が治療により短くしたら周囲のものに余計に笑われ、元どおりの長い鼻に戻つて安堵する、という筋は見られず、このストーリー展開は芥川の独創である。周囲の目を気にする僧侶、鼻の短くなつた内供への周囲の反応など、芥川の深い人間洞察が示されていると言えよう。ストーリーを追いつながら、検証を試みてみたい。

原典の『今昔物語集』の内供には、鼻を気にしているという描写は見られないものの、内供の鼻を粥の入つたお椀に落としてしまつた中童子への叱り方は屈折したものとなつてゐる。すなわち「私ではない身分の高い人の鼻を持ち上げるときもこんなことをするか」と、中童子への怒りをやや教訓めいた言葉で糊塗したわけで、中童子の「ほかにそんな鼻の人がいれば持ち上げもするが」という逆襲は、内供の言葉の欺瞞を衝いたところにも、そのおかしさがあるのである。よつて、「今昔」のこの二人のやり取りにも、近代人に劣らない心理的攻防を見ることが出来る。芥川が「今昔」のこの話を採用したのも、そういうデリケートなこ

ろを正確に読み取ったからである。そしてまた芥川の「鼻」、この原典のエピソード、「一度この弟子の代りをした中童子が、嚏をした拍子に手がふるへて、鼻を粥の中へ落した話は、当時京都まで喧伝された。」の一文を挿入することにより、『今昔物語集』を取り込む形となっている。芥川のパロディ精神、遊びの精神が発揮された箇所と言えよう。このケースと類似するパロディとしては、「地獄変」の中の良秀の言葉、「よちり不動」の火焰を描きましたのも、実はあの火事に遇つたからでござりまする。」の一文により、「地獄変」という作品が、原典の「宇治拾遺物語」を取り込んでいることが想起される。

さて、原典の内供は、特に鼻を気にしているという様子は描写されていないが、芥川の「鼻」では、長い鼻を始終苦に病んで来た「高僧」が造形されている。芥川の残した「鼻」の自解を見ると、「鼻」の "Gedankenhalt" (思想内容)のうち、「傍観者の利己主義」は "neben" (脇)な位置にあり、"haupt" (主要)なものは、「身体的欠陥の為にたえず *weilt* のなやまされてゐる苦しさ」であると記されている。さらに芥川は、「さうしてその点では僕も十分に成功したとは思つてゐない 唯実際身体的欠陥に（如何に微細なものでも）悩んだ事のある人は幾分でも内供の心もちに同感してくれるだらうと思ふ 僕はあの中に書きたくもない僕の弱点を書いてゐる点で それだけの貧弱な自信はある」と記している。「書きたくもない僕の弱点」が具体的に何なのかは明らかではないが、芥川は「鼻」を書くことで、「書きたくもない

僕の弱点」までさらそうとしたことは確かなようだ。それはなぜなのだろう。その答えの鍵は、やはり「自解」の中の、「身体的欠陥に悩んだ事のある人は幾分でも内供の心もちに同感してくれるだらうと思ふ」の部分にあると思われる。ここにはきつと、読者が「同感してくれる」ことによつて、「身体的欠陥の為にたえず *weilt* のなやまされてゐる苦しさ」を個人の孤独な苦悩から解放し、人々と分かち合いたいという作者の願いが込められているのであろう。そしてその願いが、戯画化された内供に託されていると思われるのである。

身体的欠陥がなぜ身体的欠陥であるかと言えば、それは他の人々一般と異なっているからである。人々がみんな内供のような鼻をもつていたならば、内供の鼻は「身体的欠陥」ではなくなってしまう。内供が自らの長い鼻を気にしているという事は、とりもなおさず自分の鼻が人と「違う」ことを苦し、そこからくる疎外感に悩まされていたということである。内道場供奉の職にまでのほりつめたならば、俗世間の人々など無視して傲然としてゐることも可能だったはずであるが、「愛すべき内供」は、地位も名誉も得て五十歳を越えてもなお、人々とのより良い、より深いコミュニケーションを求めていた。そしてそのような彼の思いからくる、普通の鼻の持主になりたいという願い（本音）と、長い鼻など気にするべきではない地位にいたいということ（建前）とのギャップが、彼の自尊心をいたく傷つけ、それがまた彼の虚栄心をして、長い鼻など気にしていない、という演技をさせること

となっていたのである。

自尊心を回復するための内供の試みは、内供が真面目なだけにいつそう、傍観者として眺められる読者には滑稽さを感じられるものとなっている。しかしこの内供は誇張されたまた戯画化され、客観的に突き放されて描かれてはいるが、こういう面は我々一般に多少なりともあるのではないだろうか。この内供の人物造形も、作者芥川が自己を見つめ、人間を見つめて生み出されたものであることは間違いない。そしてこの内供の様々な試みでも分かることは、内供は必ずしも自らの長い鼻の「長い」こと自体を苦に病んでいるわけではないということである。まず内供が試みたのは、長い鼻を実際以上に短く「見せる」方法であり、鏡に向かってあれこれと試みる。言うまでもなく、他人に少しでも異様に見られないようにという思いからであり、長い鼻だと不便だからと言う実際の理由に基づくものではない。そして第二の試みは寺に入りする人の中から、第三の試みは内典外典のなかに自分と同じような鼻を持つ人物を見つけて安心しようとするものであって、作品本文に「内供は、震旦の話の序に蜀漢の劉玄德の耳が長かつたと云ふ事を聞いた時に、それが鼻だつたら、どの位自分は心細くなくなるだらうと思つた」とあるように、内供は自分だけが異形の鼻の持主であることを、たまたまなく心細く思っているのである。

このような内供であつてみれば、長い鼻を短くする治療法を弟子が教わつて来たということであれば、すぐにでも飛びつきたい

と思うのは当然のことであつた。しかし鼻を気にしていることを悟られたくない内供は、自分からは是非治療を受けたいとは言ひ出せず、食事のたびごとに、「弟子の人数をかけるのが、心苦しい」などと言ひながら、弟子の方から内供に治療を受けるよう説き伏せることを待つていた。重要と思われるのは本文の次の部分である。

弟子の僧にも、内供のこの策略がわからない筈はない。しかしそれに対する反感よりは、内供のさう云ふ策略をとる心もちの方が、より強くこの弟子の僧の同情を動かしたのであらう。弟子の僧は、内供の予期通り、口を極めて、この法を試みる事を勧め出した。

これを見れば、弟子たちは内供が鼻を気にしていることを、最初から知つていたことがうかがえる。弟子ばかりでなく、周囲の人々にもそれは知れていたことであらう。作品本文の、「傍観者の利己主義」云々が説明されるくだりのところに、「誰でも他人の不幸に同情しない者はない」と記されているように、彼らは内供に「同情」していたのである。だからこそ面と向かつて「つけつけと」笑うようなことはしなかつた。内供は周囲の人々のそんな気持ちを冷静に受け止めるだけの明にも欠けていたようであるが、同情を媒介とした人間関係にも「それとなく」は、違和感を感じていたであらう。そしてもつとすつきりとした、より良いコミュニケーションを求めていたのである。内供の誤算は、鼻が短くなりさえすれば、それが可能だと考えていた点にあつた。

長い鼻を短くする治療というのも荒唐無稽でおかしさを感じさせるものとなっているが、この治療法も『今昔物語集』の原典を踏まえている（ただし『今昔』の、茹だつた鼻を踏み付けると、白い虫が穴ごとに出て来る、などのグロテスクな描写はカットされて、より「上品」なものとなっている）。そしてこの場面でも、弟子のほうが「痛うはござらぬかな」と親切な態度で内供に接するのに対し、内供は素直に喜びを表さず、不承不承に、あるいは不服らしい顔をして弟子の治療を受けるのである。もちろん自分は鼻など気にしていないし、弟子が説き伏せるものだから、仕方なく治療を受けてやっていると、というポーズを取っているのにすぎない。この内供の態度は、権力者の傲慢さというよりは、駄々っ子を思わせる態度である。内供よりも地位の低い弟子の方が精神的に成熟しているというのも、おかしさを感じさせる構図であろう。内供はそのような自分自身を客観的に分析する明にも欠けていたようであるが、内供は弟子たちや周囲の人達の親切や同情に多分に甘えているところがあるのである。内供の本質は無邪気な甘えん坊であると言えよう。

### 三、鼻が短くなった内供

治療中は不服らしい顔をしていた内供も、治療が終わって鼻を撫で、短くなっているらしいことがわかると、弟子の僧がさした鏡を「極りが悪るさうにおつおつ覗いて」見る。ここで、そ

れまでの演技しようとしていた態度が、微妙に変化していることがわかる。内供のシャイな性格が伝わって来る描写であろう。そして確かに鼻が短くなっていることを確認すると、内供は、「かうなれば、もう誰も晒ふものはないのにちがひない」と心の中でささやく。鼻が短くなったという事実よりも、このことにより人に笑われないこと、すなわち自尊心を回復させると同時に虚栄心からも解放され、人々とより良い関係、コミュニケーションを築くことができるという期待に喜びを感じているのである。「鏡の中にある内供の顔は、鏡の外にある内供の顔を見て、満足さうに眼をしばたゝいた」という描写は、自分は鼻など気にしていない、という演技をし続けてきた、内供の緊張感がぶつりと切れた瞬間を鏡が客観的にとらえたことを示していると言えよう。

しかし内供のこの期待は見事に裏切られることになる。周囲の人々は、内供が異形の鼻の持主であった時よりも、露骨に笑い始めたからである。普通の鼻になった内供がなぜ余計に笑われることになったのか、という問いかけが、この作品を小説として成立させている核と言ってもいいだろう。しかしこの問いかけに対する一つの回答を、小説の語り手は語ってしまっているのである。これまでたびたび指摘されてきたことではあるが、ここでも引いておきたい。

——人間の心には互に矛盾した二つの感情がある。勿論、誰でも他人の不幸に同情しない者はない。所がその人がその不幸を、どうにかして切りぬける事が出来る時、今度はこつ

ちで何となく物足りないやうな心もちがする。少し誇張して云へば、もう一度その人を、同じ不幸に陥れて見たいやうな氣にさへなる。さうして何時の間にか、消極的ではあるが、或敵意をその人に対して抱くやうな事になる。――内供が、理由を知らないながらも、何となく不快に思つたのは、池の尾の僧俗の態度に、この傍觀者の利己主義をそれとなく感づいたからに外ならない。

ここは大高知見が「明白な主題文を含む一節を直截的に語る表現方法」であると述べ、また三好行雄がかつて「傍觀者のエゴイズム」をいう作者の説明が、主題の奥行きを消した憾みもある」と述べたように、作者が語り手に解説的言辭を語らせてしまったところである。文学においてはこのような解説的言辭は極力避けるべきであると思うが、若い頃の芥川には言葉の伝達力に対する無邪氣な信頼感があり、言葉でうまく「説明」すれば、ある事象を正確に伝えることが可能だと思つていたふしがあつた。しかし言うまでもなく言葉による表現には限界があるのであつて、文学はむしろその限界性を逆に武器にすべきだと言う点では、「傍觀者の利己主義」の説明のくだりは無くもなうということはいへるかもしれない。しかし作者芥川がここで語り手に「傍觀者の利己主義」云々について語らせたことは、重く受け取るべきであろう。若い芥川の、このことを強く訴えたいという願望の現れが、直截的な、説明的な言辭に走らせていると考えられるからである。しかし、この小説世界の中で起こっている事象と、「傍觀者の利

己主義」云々の説明とは、やはり微妙なずれがあるように思われる。和田繁二郎博士は、かつて「この笑いの原因は傍觀者の利己主義にあるよりも、どうやら、内供自身の中にありそうなのである。」と述べたが、確かに、長い鼻が普通の鼻になつても笑われるというこのケースは、一般的に当て嵌まるとは思えない。すなわちこの情況は、当事者がこの内供であるから発生した個別なケースであつて、人が変わればまた情況も変わるはずなのである。

しかし、この語り手は、そんなことは等閑に付してしまふ。すなわち、「鼻」の "Gedankenhalt" (思想内容) で、"tamp" (主要) なものは「身体的欠陥の爲にたえず vanity のなやまされてゐる苦しさ」であつたはずなのであるが、ここでの語り手は、内供の "vanity" (虚栄心) と事象との関連性の洞察は行方不明になり、"nathan" (脇) な位置にあるはずであつた「傍觀者の利己主義」が全面的に前へ出て来ているのである。三好行雄が、「傍觀者の嘲笑に傷つく被害者としての内供を描く後半と、(宋ゆる寺)の高徳の長者としてあらわれ、長鼻ゆえに傷つく自尊心と偽善をあはかれる前半とは、モチーフのうえで微妙な差がある。」と評した所以であらう。つまり寫田明子<sup>10)</sup>や戸松泉<sup>11)</sup>が指摘しているように、この語り手は明らかに内供に寄り添つていたのであつて、嘲笑の責任を内供自身も負うべきであるという背景を、客觀的に把握していないのである。これはおそらく、芥川自身が「僕はあるの中に書きたくもない僕の弱点を書いてある」と述べているような事情に原因があるのであつて、「鼻」の内供は「羅生門」の下人など

に比べれば極力客観的に人物が造形されているとは思うが、どこか内供を突き放し切れない、没入しているところがあるのである。

その、内供の鼻が短くなつてからの周囲の人々の嘲笑の責任の一端を内供自身も負うべきであるということの意味であるが、かつて石割透が「内供が鼻を正常なものにしようとして治療を受けたことは、それ迄隠された形であつたコンプレックスを僧俗の間に、恐らくは初めて曝したことを意味しよう」(傍点原文)と述べたように、内供のコンプレックスはあくまでも「隠された形」にすぎなかつたのであつて、治療時における弟子の態度でも分かるように、内供が自らの鼻にコンプレックスを持つていたことは、周囲の者には元々知れていたことであつた。作品本文に「誰でも他人の不幸に同情しない者はない」と明記されているように、周囲の者は内供に同情を寄せ、だからこそ「つけつけ」と笑うようなことはしなかつたのである。内供が「日常の談話の中に、鼻と云ふ語が出て来るのを何よりも惧れてゐた」と同時に、周囲の者たちは、内供の前で鼻という語が話題になることを極力避けていたはずなのである。問題なのはそのことに全く気づかなかつたらしい内供である。周囲の者の気配りにもかかわらず、内供はあくまでも自分は鼻など全く気にしていないと演じ続け、周囲の者の親切に対して、例えば治療を施してくれる弟子に不服らしい顔で接するなど、駄々っ子のような態度をとり続けたのである。内供としては、自らの異形の鼻そのものが人々とのコミュニケーションの妨げになつていと認識していたので、彼のレベルでは自然

な行動であつたが、周囲の者にとっては快いものであるはずはない。ただ彼らの間で、内供が「不幸」な人であるという認識があつたがゆえに、「つけつけ」と笑うことは控えるなどの同情のコンセンサスが自然に発生したのである。しかし内供の鼻が短くなつたことで情況は一変する。今まで同情をかけてやつていた対象が、その同情に対する見返りが何もないまま、自分は同情をかけられるようなことは何ひとつ無い人物なんだと主張し始めたのである。周囲の者たちが、それまでの内供の「鼻など全然気にしていない」という演技や、鼻が短くなつた内供の暗れ暗れとした表情に憎悪を抱き始めたとしても無理はないであろう。それまでは同情があつたればこそ、内供の「演技」を大目に見てやることもできたが、そつちがその気ならば、もう遠慮することはないというわけである。しかもまた彼らは、短くなつた鼻を笑うことが、内供にいかにか大きな心理的ダメージを与えるかも知認識していた。内供のデリケートな心持ちもまた、周囲の者に見透かされていたのである。

こういうボタンの掛け違いがどこから来ているのかと考えれば、やはり内供の、鼻など気にしていないという「演技」にあると言わざるを得ない。内供が周囲の人々とより良いコミュニケーションを創造するには、自分が鼻を気にしていることを告白すべきだとは言わないまでも、隠そうとしたりなどはするべきではなかつたのである。ごまかしではない率直な態度をとることにより初めて、内供の心の痛みを分かち合えるような、「同情」を媒介

とはしないコミュニケーション創造の可能性が生まれたてであろう。そしてそのような環境があつて初めて、鼻が短くなつた内供が祝福される人間関係が生まれるのである。そのような努力を全くすることなく、鼻さえ短くなればより良いコミュニケーションがとれるだろうなどと考えるのは、虫が良すぎるのである。「つけつけ」とした笑いは、そのような「内供の利己主義」に対する攻撃であつたと言えよう。しかし「言うは易し」で、人間は虚栄心や自尊心からそう自由になれるものではない。内供は俗物権力者として描かれているのではなく、そのような人間の実相が描かれているのである。

そのような内供の利己主義を踏まえたくて、初めて「傍観者の利己主義」について云々することができる。周囲の者は異形の鼻を持つ内供を「つけつけ」とは笑わないだけの優しさは持ち合わせていたが、それは同情に基づくもので、自らの優位性に浸っていられる安心感に基づくものであり、真に内供の心の痛みを汲みとろうとしたものではなかつた。そのことは、「内供の俗でない事を仕合せだ」とか、「あの鼻だから出家したのだらう」などと勝手な事を言っていることからわかる。だからこそ内供の鼻が短くなり、自らの優位性の基盤が脅かされたとたん、露骨に内供を攻撃し始めたのである。自らの都合によつて同情をかけたたり、攻撃したりするありようは、やはり「傍観者の利己主義」と称して差し支えないだろう。そしてこのような周囲の人々の反応も、やはりエゴイズムから自由になれない人間の実相なのである。

「当事者の利己主義」なり「傍観者の利己主義」なりがどこから描き出されているのかと考えれば、やはり作家がそれまでの人生で体験し、血肉化したものから削り出されたと考えられないだろう。思い出されるのはやはり次の手紙である。

「イゴイズムをはなれた愛があるかどうか イゴイズムのある愛には人と人との間の障壁をわたる事は出来ない(中略) 周囲は醜い 自己も醜い そしてそれを目のあたりに見て生きるのは苦しい」(一九一五・三・九井川恭宛)

「僕は霧をひらいて新しいものを見たやうな気がする しかし不幸にしてその新しい国には醜い物ばかりであつた 僕はその醜い物を祝福する その醜さの故に僕は僕の持つてゐる、そして人の持つてゐる美しい物を更によく知る事が出来たからである しかも又僕の持つてゐる、そして人の持つてゐる醜い物を更にもっとよく知ることが出来たからである」(一九一五・三・一二井川恭宛)

「鼻」に表れている「内供」と「傍観者」の「利己主義」と、失恋体験によつて認識した「自己」と「周囲」の「イゴイズム」は、やはり照応していると言えるだろう。したがつて、「あの頃の自分の事(削除分)」の記述、「自分は半年ばかり前から悪くこたはつた恋愛問題の影響で、独りになると気が沈んだから、その反対になる可く現状と懸け離れた、なる可く愉快な小説が書きたかつた。そこでとりあへず先、今昔物語から材料を取つて、この二つの短編(「羅生門」と「鼻」のこと―田村注)を書いた」と

いう記述は、あながち虚構であるとは言い切れず、この「鼻」においても、その信憑性は高いものと思われるのである。

#### 四、再び鼻が長くなった内供

鼻が短くなった内供は、周囲の者たちとより良いコミュニケーションが取れるようになるどころか、ますます悪化させることになった。自分の思いどおりにならないことから「二言目には、誰でも意地悪く叱りつける」ところなどは、やはり駄々っ子を思わせる態度であると言えよう。より良いコミュニケーション創造の願いが裏切られた内供は、やり場のない悲しみ・怒りを周囲の者に当たり散らしているのである。そして内供は、「なまじひに、鼻の短くなったのが、反て恨めしく」なる。内供が、鼻が短くなること自体を望んでいたわけではないことは、ここでも明らかであろう。一九九五年から刊行された現在最も新しい岩波書店の全集には、「鼻」草稿」が収録され(第二十一巻)、芥川の苦心の様子をうかがうことができ興味深いのが、私が注目したのは、鼻が短くなっても笑われたことに対する、内供の思案の次の部分である(「草稿」v-aより)。

しかし 内供の心を苦しめたものは 単に池の尾の僧俗が晒ふと云ふ事実ばかりではない 前には人が可笑しさうな顔をしても内供は必その中に幾分か自分に対する同情を看取する事が出来た(時としては その同情が一種の侮辱のやうに思

はれる事もあつたが)所が今 中童子や下法師が晒ふのを見ると そこには殆一点の憐愍さへも動いてゐない―神経質な内供はすぐにこの事実が気がついた

定稿の内供は、その笑いの変化の中に同情の有無という相違を明確に認識するだけの明にも欠ける、より「愛すべき」人物として造形されることになったが、作品の中の情況としては、笑いの変化の中に同情の有無の相違が設定されているとみて間違いないであろう。そして内供は、短くなった鼻を笑われることによつて、「傍観者の利己主義」をそれとなく感づくと同時に、以前の自分が同情によつてある程度は守られていたことにも、臆けながらも気づき始めたはずなのである。だからこそ内供は、「なまじひに、鼻の短くなったのが、反て恨めしく」なったのではないのか。

そのような情況であつてみれば、再び鼻が元どおり長くなつて「はればれた心もちが、どこからともなく帰つて来る」ように感じるのも、自然な感情であると納得できる。鼻そのものは元の木阿弥になつてしまつたが、内供は一旦鼻が短くなることによつて、長い鼻の自分が周囲の者たちの同情により、ある程度は守られていることを、それとなくは学習したのである。そしてそのほうが、鼻が短くなつて周囲の容赦のない攻撃にさらされるよりは、よほど居心地が良いことを悟つたのである。

しかし内供は、それ以上は成長しなかつたようだ。田中美や戸松泉が指摘しているように、作品冒頭近くの「勿論表面では、今でもさほど気にならないやうな顔をしてすましてゐる」の一文

は、再び鼻が長くなつた後も、内供は相変わらず「演技」を続けていることが示されている。結局「愛すべき」内供は、真のコミユニケーションを深めるための方策を真剣に考えることもなく（その明に欠けていたと言えばそれまでであるが）、その努力を放棄してしまつたのである。してみると、作品「鼻」は、作家芥川がそれまでの人生で体験した自己と周囲の者たちのエゴイズムを客観的に見つめ、「自然其儘の可笑味」を感じさせる作品に結晶化した点で優れた作品であるということが出来るが、たとえ身体的欠陥があつても「人と人との間の障壁をわたる」事のできる可能性が示され得なかつたところに、その限界があるといふことは言えよう。しかし内供と作者芥川とが決定的に異なることは、芥川はこの作品の中に「書きたくもない僕の弱点」を書こうとしたことである。芥川のそのとりすましたイメージとは裏腹に、彼は内供のように「演技」に徹することなく、虚構の中ではあつても、自らをさらそうとした。その点、作者芥川龍之介は、内供よりもずっと有効な方法で、かつ誠実に、我々読者に、より深いコミュニケーションを訴えていると言えるのではないだろうか。

#### 注

- (1) 笠井秋生「鼻」―漱石書簡の意味（『芥川龍之介作品研究』双文社出版一九九三・五）
- (2) 赤羽学「芥川龍之介の「鼻」における治療の問題」（『文芸研究（東北大学）』一九九二・五）

(3) 越智良二「鼻」の歪み（『近代文学試論（広島大学）』一九八〇・十二）

(4) 『芥川龍之介全集第二十三巻』（岩波書店一九九八・一）に拠つた。

(5) 大高知児「芥川龍之介「鼻」論―禪智内供の心緒を巡って―」（『紀要文学科（中央大学）』一九八八・三）

(6) 三好行雄「負け犬―芋粥」の構造―（『芥川龍之介論』筑摩書房一九七六・九所収）

(7) 芥川を「コトバの楽天主義を固く信ずる作者」（傍点原文）と評する浅野洋の論がある（「地獄変」の限界―自足する語り―、『文学』一九八八・五）。芥川は、晩年には逆に言葉の伝達力に対し、絶望的とも言える不信感を抱いている。遺稿「十本の針」の「十言葉」には、次のように記されている。

わたしたちはわたしたちの気もちを容易に他人に伝へることは出来ない。それは唯伝へられる他人次第によるのである。「枯華微笑」の昔は勿論、百数十行に亘る新聞記事さへ他人の気もちと応じない時には到底合点の出来るものではない。「彼」の言葉を理解するものはいつも「第二の彼」であらう。しかしその「彼」も亦必ず植物のやうに成長してゐる。従つて或時代の「彼」の言葉は第二の或時代の「彼」以外に理解することは出来ないであらう。いや、或時代の彼自身さへ他の時代の彼自身には他人のやうに見えるかも知れない。が、幸ひにも「第二の彼」は「彼」の

言葉を理解したと信じてゐる。

- (8) 和田繁二郎『芥川龍之介』（創元社一九五六・三）
- (9) 三好行雄前掲論文
- (10) 嵐田明子「『鼻』における語り手の意味」（『上智近代文学研究』一九八九・三）
- (11) 戸松泉「『鼻』の語り手」（『相模国文』一九九五・三）
- (12) 石割透「『鼻』——形式と内実の離反——」（『芥川龍之介——初期作品の展開』有精堂一九八五・二）
- (13) 「あの頃の自分の事」は『中央公論』一九一九年一月号に掲載されたが、その中の第二章、第六章は削除されて、単行本『影燈籠』・『或る日の大石蔵之助』に収められた。引用部分は削除された第二章の一部である。
- (14) 田中実「芥川文学研究ノート③『鼻』と『龍』（『都留文科大学研究紀要』一九九四・三）
- (15) 戸松泉前掲論文
- (16) 一九一五年三月九日付井川恭宛書簡より引用。  
（たむら・しゅういち 舞鶴工業高等学校非常勤講師）